

オウム対策住民協議会ニュース

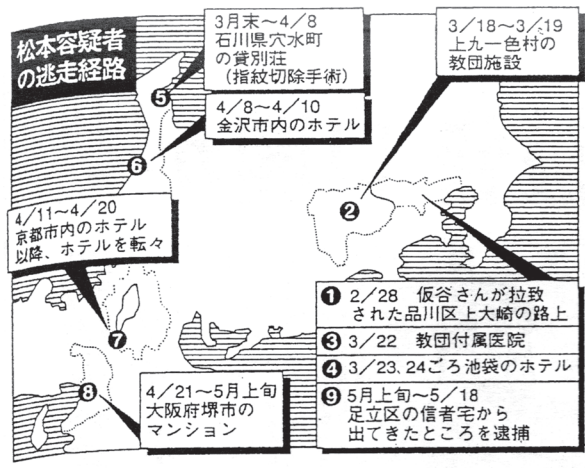
烏山地域オウム
真理教(現アレフ)
対策住民協議会

あの時を忘れない Vol 2

目黒公証役場の事務長が

拉致・監禁・遺体を焼却された

1994年6月の松本サリン事件、1995年3月の地下鉄サリン事件に象徴される一連の無差別大量殺人・拉致・勧誘・監禁。オウムが引き起こしたこの恐怖の事件が、時の流れの中で私たちの記憶から薄れかけてはいないか。私たちは忘れない。この教団の非合理性、暴力性、幼稚さ、詭弁のすべてを。前号の「坂本弁護士一家殺人事件」に引き続いて、私たちはこのオウムの罪をシリーズで追いかけていきます。二回目の今回は地下鉄サリン事件の重要な引き金となったオウムの悪辣な資金集め目的の「目黒公証役場事務長拉致・監禁・殺人事件」を追います。



人通りの多い白昼、路上で

オウムは1989年の総選挙で公職選挙法で確認団体の認定を得るために25人の候補を立てて惨敗、供託金を没収された。その後ロシアに進出、これにより一層資金が必要になり、無理な、お布施や出家を推奨するようになっていた。

95年2月28日午後、目黒公証役場の路上で、7~8人の男性によってワゴン車で拉致された。目黒公証役場は元裁判官だった実妹の夫が開設したものである。腰痛に悩んでいた実妹は夫が亡くなった後、ヨガ教室の指導者の勧めで多額のお布施をしてきたばかり

か、一切の財産を寄付して出家すると言いだしていた。

捜査攪乱と隠蔽工作

假谷さんはこれに不安を感じ、強く反対し「完全に縁を切るように」勧めていた。拉致実行者の一人松本剛は拉致に使用するレンタカーを借りる際、申し込み書類に指紋を残すミスをしており、オウムは松本に逃亡資金を送る一方で、金沢市の潜伏先には林郁夫(事件後に逮捕)の指紋をベタベタ残し、指紋検出捜査を攪乱するなど教団を挙げて隠蔽工作を重ね、捜査の手が迫ると今度は慌てて捜査攪乱を狙って地下鉄サリン事件へと突き進んだのである。オウム側は例の通りこの事件を「テッチ上げであり、国家権力による宗教弾圧だ」と主張していた。

妹はヨガに関心をもっていた

実妹は腰痛があるためヨガに関心をもっていた。94年秋自宅にスーパースターアカデミー(オウム関連会社)のチラシが入った。自宅からほんのひと駅となりだし、普通のヨガ教室だと思つて申し込んだ。この教室は翌年の7月には閉鎖したが、その時の指導者が在家信者で、閉鎖後も時々訪ねて来て入会を誘った。実妹はゴルフ会員権の一部の売却代金六千万円をお布施したが、さらに、都内の土地建物などのお布施を迫られていた。この間、実妹は頭に電極をつけて麻原彰晃教祖の脳波を流すというパーフェクト・サイバージョンという修業を受けている。これを受けるのに一般信者は一千万円かかると言われていた。

別荘の権利をお布施しろ

さらに友人と共同で購入した箱根の別荘の権利を2月28日までにオウムに渡すよう求められていた。オウムの修業に疑問を感じ始めていた彼女は、2月25日「オウムの教えは守つていくが、出家はやめることにします」と甥(假谷さんの長男)に語り、教団施設を脱出して、とりあえず何処かに身を隠すことを甥に相談している。オウム側は公証役場に假谷さんを訪ね「ゴ

ルフの会員権のことで話したい」と彼女の居場所を探りに来ている。このことがあつてから假谷さんにオウムの尾行がつき、ついには事務所の出入りまで見張られるようになり、假谷さんはその恐怖を家族に語っていた。

残酷! レンジで遺体を焼却

1995年5月28日、特別指名手配の松本剛が手配後58日目に足立区で逮捕された。指紋を切除し、整形し、他の女性信者と家族を装って潜伏、ロングヘアの女装道具まで揃えての逃亡の末だった。既に地下鉄サリン事件で逮捕されていた中川智正(法皇内庁トップ)の供述と現場検証から、事件の残酷な全容が明らかになった。

資金集め、各地でトラブル頻発

この他にもオウムの偽装、法違反の手段を選ばない資金・資産集めは各地で住民とのトラブルを頻発させていた。熊本県・波野村では和解金として村の年間予算二十四億のうちの九億二千万円を支払わせている。宮崎県・小

地下鉄サリン事件8年を経過して

3月20日、地下鉄日比谷・千代田線の電車内に、オウム真理教によつてサリンがまかれて8年目を迎えた。12人が死亡、約5,500人が負傷するという、日本の犯罪史上の中でもまれに見る凶暴で残忍な事件であった。今なお後遺症で苦しんでいる被害者が多数いる。被害者の支援活動をしている「リカバリー・サポート・センター」の検診結果でも75.7%が「目が疲れやすい」、43.5%が「体が疲れやすい」、「頭痛がする」も42.8%にのぼる。被害を受けた事も言えず、会社で「怠け」だと見られ孤立している被害者もいます。何の罪もない人々がある日突然、身体に異常をきたし、自分の思うような生活をする事もかなわなくなつてしまふ。多くの被害者の心の中は、はかり知れない怒りでいっぱいだと思う。

先日の裁判で麻原彰晃は、被害者の気持ちを逆なでするような態度を裁判所の中でとり続けている。被告人証言でも裁判長の再三の呼びかけにも一切耳を貸さず、始終無言を押し通すという愚挙に出た。

私達、烏山地域オウム真理教対策住民協議会は、オウム真理教が過去に犯した犯罪を風化させてはいけなく、考え、「住民協議会ニュース」の中でも、オウムが犯した様々な事件を連載で取りあげている。

昔に戻りつつあるオウムを、私達は絶対に許さない。「世田谷区にオウムはいらない」「日本にオウムはいらない」の声を大きくし、一連のサリン事件の被害者と連帯し、国に対しても被害者の救済を含め、要求するものです。

烏山地域オウム真理教(現アレフ) 対策住民協議会

